鳥山石燕『画図百鬼夜行』陽の巻を読む

倉本　昭

本稿は平成二七年、本誌第五〇号掲載の「『画図百鬼夜行』の構成に関する一考察」の続稿である。

前稿では『画図百鬼夜行』（以下『画図百鬼』と略す）の陰の巻について考察し、末尾に以下のような説をまとめた。

①『画図百鬼』陰の巻に掲載される化け物の図には、それぞれ、そこはかとない滑稽性を感じさせるような趣向が設けられている。

②『画図百鬼』陰の巻に並ぶ化け物たちは、前後のつながりを意識して配列されており、読者は、どういう縁でつながるかを読みとくことで、知的興趣を味わえる。①でいう滑稽性が、妖怪図のつながりの中で醸し出されることもある。

この二つの説を、陰の巻に続く陽の巻で検証しようとするのが本稿である。

『画図百鬼』の原典は、国書刊行会刊『鳥山石燕 画図百鬼夜行』並びに、角川文庫『鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集』に拠った。ただし後者は原典の写真を表紙・各巻目録に至るまで全て収めたものではない。

なお、文中の引用には、原典にない句読点を補い、字体を現行のものに変えたことを断っておく。

一　陰の巻から陽の巻へ

筆者は『画図百鬼』陰の巻の検討を通じて、個々の化け物の図が、前後あるいは前後いずれかで、何らかの縁により、つながっていることを指摘した。このことから、陰の巻から陽の巻への移りに、やはり何らかの「つながり」が見出せはしないか、検討してみる。

『画図百鬼』陰の巻掉尾を、「狐火」の図が飾っている。とこ

ろが筆者は、ここにくる化け物として、当初「垢嘗」が予定されていたのではなかったかと推測した。それが狐火に代えられたのは、陽の巻の冒頭に、妖火を操る蜘蛛の化け物「絡新婦（じよらうくも）」を配することとし、それと妖火の縁でつなげるために、わざわざ「狐」を「狸」との組み合わせから外して、巻末に移した結果ではなかったかと考えた。また、狐と絡新婦は人間の女に化けるという共通点でもつながるだろう。(注1)

絡新婦は、蜘蛛の化け物というより、後続の化け物の類型から考えても、火妖の一種として、陽の巻冒頭に据えられているとみてよい。陽の巻の前半に、絡新婦以下、火妖群が並ぶのは、巻名からして、ふさわしいことである。

続いて、絡新婦図の趣向を読み解いてみよう。「じよらう」とは勿論「女郎」であることから、絡新婦を着物をはだけた遊女に見立てたのだと考えられる。ところが、着物と見えるものは、実際は着物ではなく、かといって、化け物の繰り出す糸なのか、化け物の身体なのかも判然としない。着物の模様と見えるのは、化け物が巣くう梅の老木の枝に咲く花である。これは「だまし絵」的効果を狙った図柄といえよう。

梅木模様の着物をまとう遊女は「梅の位」の遊女、すなわち天神を表す。天神が手練手管にたけて、客を手玉にとるように、絡新婦は、蜘蛛が吐く妖火を糸で自在に操るといいたいのだろう。絡新婦が蜘蛛の尻から出る糸を爪先にひっかけて操る様は、とんぼ釣りを彷彿とさせる。絡新婦の肢が棹で、おとりのとんぼの代わりに、蜘蛛が糸の先についていると見ればよい。「女郎」蜘蛛だけに、釣るのは人間の男で、彼らがおとりの妖火に惑わされて近づいたら、餌食にされるに違いない。ちなみに、西鶴の『好色一代男』巻六「詠は初姿」に「引ふねの女は、あとにかへし、禿計を召つれ、ともし火のうつり、枕近く立より、それそれ申々、めづらしき蜘が〳〵と、申されければ、世之介夢おどろき、いやな事と、起あがる所を、しかとしめつけ、女郎蜘が、取つきますといひさま、帯とかせ」(注2)とあるのは、「女郎蜘蛛」で遊女を指す好例だから、参考として掲げておく。

ところで、絡新婦が妖火を伴うイメージは、『和漢三才図会』の「絡新婦　ぢよろうくも」の項から来ていて、そこに「老者能生火、闇夜或微雨中偶見之、大可小椀、円而帯微青色」と見える通りである。(注3)

絡新婦を天神の位の遊女に見立てる趣向が思いつけば、古来、梅は花魁＝花のさきがけというから、巻頭に梅を意匠に加えた絡新婦図をもってくるのも自然であった。

絡新婦に続いて丁裏には鼬がくる。化ける生き物の縁で絡新婦からつながっている。周りから廓通いを厳しく咎められた男が、悪所とキッパリ縁を切る様を、「鼬の道を切ったやう」の語で表すことがある。絡新婦が遊女に見立てられ、その次に鼬を出して

きたのには、そうした言葉に導かれた可能性があることも指摘しておこう。

また、この図では、鼬のよみがなに「てん」と振ることに注意したい。描かれているのは「てん＝貂」なのである。「鼬のなき間の貂誇り」ということわざがある通り、貂が鼬のいない間に火柱のまねをして一人前面をしているところに諧謔性がある。鼬と書いて、わざわざ「てん」と読ませるのは、そこに気付かせるためでもある。

鼬の火柱は『本朝食鑑』「鼬鼠」に「村市夜間空中有焔気、高升如立柱、呼称火柱、其消尽処必有火災、此言群鼬作妖也」と見え、石燕が確実に参考にしていた『和漢三才図会』にも同様の記述がある。(注4)

鼬ならぬ「貂の火柱」は、寺塔の相輪の一部をなす水煙に見立てている。火災の因たる火柱を、わざわざ火を忌んで水の字を当てる水煙に見立てるところに、皮肉な笑いが潜んでいよう。ここで寺との縁を見出したら、次に、壬生寺の悪僧・宗源が化けた叢原火へとつながるのにも、うなずけよう。また、叢原火の図中詞書に「朱雀の宗源火といふ」とある。たとえば『俳諧小傘』では、鼬の付心の一つに「野」を挙げているから、鼬から（朱雀）野―叢原火（宗源火）とつなげるのは、俳諧的発想ともいえる。

二　火妖のカタログ

炎の中に悪僧の顔が浮かぶ叢原火に続いて、釣瓶火も、人の顔らしきものを有する火妖として描かれている。この化け物は、『古今百物語評判』巻一―四「西の岡の釣瓶をろし幷陰火陽火の事」に見える、「釣瓶をろし」なる化け物にもとづいている。(注5) 釣瓶をろしは、大木の精で「木生火」の理に従って生じた妖物であり、木の下の暗がりに現れ、若木からは生じないと説明されている。(注6) 石燕描く釣瓶火は、その釣瓶をろしの挿絵を参考にしたらしい。しかし彼は、釣瓶火の顔を、狂言面の祖父に似せて、岩に生えた老松の精であることを示唆し、釣瓶をろしの挿絵とは異なるイメージを表している。また、画面右端上半分から突き出た大岩から、まるで腕をさしだすように松の枝が伸び、その下に釣瓶火がぶらさがる様は、手車を思わせる。手車であれば、操る人によって上げ下げされるわけだから、その動きをもって釣瓶のような火、すなわち釣瓶火と呼ぶのも、なるほどとうなずけるのである。

画面右端から巨岩が突き出る構図は、寛延五年刊・長谷川光信画『絵本家賀御伽』中の「ブリ」を用いたトンボ釣りを描く図がヒントになったのかもしれない。この絵本には手車売りの図もあるし、おとりトンボを用いたトンボ釣りの図まである。絡新婦の姿態に、こちらのパターンのトンボ釣りの見立てが読みとれるこ

とは先述した。[注7]

釣瓶火と対をなす「ふらり火」は、『画図百鬼』と関係が取りざたされる佐脇嵩之画「百怪図巻」や、秋田県個人蔵「化物づくし」といった絵巻にも描かれている。これらや（未発見の）同系統の絵巻に載る「ふらり火」に基づいて、石燕が絵筆を揮ったことは明らかである。しかし、彼の描く「ふらり火」図には、下部に芭蕉の木が描き添えられていることに注意がいる。

ふらり火の前に来る釣瓶火の図には、岩鼻に生える松が描かれていた。松と芭蕉との縁を探ると、まず謡曲「芭蕉」の「芭蕉に落ちて松の声、芭蕉に落ちて松の声、徒にや風の破るらん」[注8]の詞章が思い起こされる。ただ、石燕にあっては、それよりも松尾芭蕉の「芭蕉を移す詞」が念頭にあったかもしれない。そこには「松はひとりになりぬべきにやと、遠き旅寝の胸にたゝまり、人々のわかれ、ばせをの名残、ひとかたならぬ侘しさも終に五とせの春秋を過して、ふたゝび芭蕉になみだをそゝく」とある。[注9]

さらに、見落とすべきでないのは、石燕が「ふらり火」に、どことなく芭蕉の花を重ねていることである。「ふらり火」の首は芭蕉の花茎。両翼は芭蕉の花の開いた苞。羽毛は雄花、胴体は芭蕉の花の蕾に当たる。芭蕉の花の苞が黄色いことから、火妖との連想が働いたのであろう。

芭蕉の花が炎に例えられる例は、漢詩に見出せる。たとえば、韓偓「紅芭蕉賦」に「瞥見紅蕉、魂随魄消、陰火与朱華映、神霞将日脚相焼」、李紳（杜牧説も）「紅蕉花」に「紅蕉花様炎方識、瘴水渓辺色最深、葉満叢深殷似火、不唯焼眼更焼身」とある。

また、『本草綱目』巻一五草之四「甘蕉」の釈名には「時珍曰……曹叔雅異物志云、芭蕉結実其皮赤如火」とあり、集解には「恭曰……花出弁中極繁盛、紅者如火炬、謂之紅蕉」と見える。

また『画図百鬼』の「ふらり火」は、『化物づくし』『百怪図巻』に描かれたものと比べると、コウモリに近い印象を受ける。これは、『酉陽雑俎』に「南中紅蕉、花時有紅蝙蝠集花中」とあるのと関係があるかもしれない。

いずれの例も紅蕉であり、普通の芭蕉とは異なるけれども、石燕が「ふらり火」図を構想するのに参照した可能性はある。

ここまで検討してきて気づくのは、火妖図の多くに見立ての趣向が見出せることである。絡新婦が遊女のとんぼ釣、鼬が水煙、釣瓶火が手車、ふらり火が芭蕉の花を見立てたと、筆者は主張した。見立ての趣向こそが、これらの図の滑稽性につながっていること、言うまでもない。

「ふらり火」の次には「姥が火」が載る。「ふらり火」を間にして、前に老翁の顔のような釣瓶火、後ろに「姥が火」が配される。「姥が火」と「ふらり火」の縁については、『和漢三才図会』

巻七五「河内」の河内郡に載る「姥火」の項目に、「按偶有逢姥火者、語曰彼火飛也、高丈余、急来于面前、驚覆仆潜見之、火有枕頭、実即鳥也、大如雌鶏、火出於口、毎叩嘴有音」と見えるのが参考になる。また、この記事に基づいて書かれた『諸国里人談』巻三・「六 光火部」の「姥火」も無視できない。『里人談』には、最近姥火に遭遇した人がいて、聞くところによると、その姥火が飛んできて面前に落ちたから、うつ伏せになって静かに様子をうかがうと「鶏のごとくの鳥あり。嘴を叩く音」がしたと書かれている。[注10] これらの記事をふまえて、鳥のような「ふらり火」の次に姥が火をもってきたのであろう。

姥が火の絵は、『西鶴諸国ばなし』巻五―六、『西鶴名残の友』巻五―五に見えるが、石燕描くところは、西鶴本のものよりも、明和四年刊『新説百物語』巻四―七「火炎婆々といふ亡者の事」に見えるものに近い。[注11]

見開きに対をなす姥が火と火車とのつながりは、説明に難くない。悪心の老婆を「火車婆」といい、廓の遣手婆を火車（花車・香車）と呼ぶから、姥から火車婆の語を連想し、化け物の火車を姥が火の次に配置したのである。

石燕は、これまで牛頭・馬頭や雷神の如き様態で描かれていた火車を、山猫のような頭をした二足歩行の怪物に仕立てた点に、工夫を見せる。とはいっても、佐脇嵩之「百怪図巻」（もしくは同系統の絵巻）に描かれる火車が、石燕の目に入り、それに耳と体毛を加える形でアレンジしたのが『画図百鬼』の火車だろう。[注12] では、なぜ石燕は、そのように描いたのか。これは、堤邦彦に詳論がある通り、[注13] 猫又が、死者の身体を奪っていく火車と習合していたことと関わりがある。参考に『多満寸太礼』巻四―三「火車説幷猫取死骸事」の梗概を紹介しておこう。

上野国名古の禅寺・宗興寺を、周厳が住持していたときのこと。村の名主が臨終を迎えた日の深夜、周厳は、寺に飼われる猫が板縁で仲間と話すのを聞く。猫たちは名主の遺骸を奪うことを計画していた。しかし寺の飼い猫は、住持の心にスキがないことを警戒する。代々名主の遺骸は、葬礼の最中に、黒雲から現れる何物かに奪われていて、その犯人は猫又たちであったのだ。周厳が、何食わぬ顔で戻った猫を叱責すると、猫は逃げ出した。翌日、野辺送りの最中、天がにわかにかき曇ったが、周厳は恐れず呪文を唱えて猫又どもの罪を責めた。雲は晴れ、葬礼は無事終わる。村人は猫を全部村から追放した。

似た話が『御伽人形』巻一―三「幻に見る人しらぬ貍（ねこまた）」にもある。こちらは、北国の禅寺を舞台に、和尚が村の女の遺骸を奪おうとする寺の飼い猫たちの企みを挫く内容である。

石燕は、こうした、猫又―火車を習合させる話などにヒントを得て、山猫のような頭部の火車を描いたのであった。火消しならぬ火妖が、町家の屋根の天水桶に、乱暴に足をかける皮肉も見逃

してはなるまい。

以上、様々な火妖がカタログのように並ぶ陽の巻前半であった。絵解きそのものの興趣、化け物同士のつながりを読み解く興趣が、滑稽性と無縁ではないことを確認しておかれたい。

三　鳴屋・姑獲鳥・海座頭図を読み解く

火車は巻頭から続いた火妖群のしんがりである。一転して、次に来るのが鳴屋（やなり）である。火車から鳴屋へは、どのようなつながりを考えたらよいか。

まず『西鶴織留』巻一―三「古帳よりは十八人口」の梗概を記そう。

大坂堺筋の塗り物屋の二代目が、商いを広げたのに、歳末に手詰まりが生じるようになる。律儀な隠居の母は、息子が妻の贅沢な生活を許し、先代のような質素倹約を心掛けないから、金まわりが悪くなり、店のものにも軽蔑されるのだと、説教する。しかし妻の贅沢はやまず、夫の悪口を言うばかり。あろうことか「なんの事もない座敷を、家鳴がするといひ出し、人の心をなやませ、此家の衰微をよろこぶ」[注14]。遂に二代目は悪妻を離縁するが、身上をつぶすことは避けられなかった。

この話を参考にすると、家鳴は家が衰微する凶兆にほかならない。火車は本来、獄卒が罪人を地獄へ引くため引いてくるもので、中世・近世の文学に登場する火車の多くは、積悪の人の遺体をさらう。石燕描く火車がさらう女も生前に罪を重ねていたのだろう。悪徳にまみれた女の遺体を火車にさらわれるような家は、もとより家運が衰微している。さような家には、家鳴がしてもおかしくはあるまい。

以上の如きニュアンスで、火車から鳴屋につながってくる。[注15]

鳴屋図を見て読者の注意がいくのは、当然、縁側の柱を抱きかかえている小鬼である。小鬼がかぶる頭巾は、ちょうど二本の角が当たる部分に、山伏がかぶる頭巾における宝冠のような突起が出ている。小鬼がかぶるだけに、ツノズキン（角頭巾）なのだから、二本の突起があるのだ、という諧謔のつもりであろうか。なお鬼が頭巾を着用する例は、既に「酒呑童子絵巻」に見られる。[注16]

それよりも、この頭巾をかぶった小鬼の格好自体に、『画図百鬼』出版当時の目の肥えた読者は、微笑を誘われたのではないか。この小鬼の格好から、『水滸伝』の英雄・魯智深が柳の木を地面から引き抜く場面を想起できたからである。小鬼の身体の剛毛が、花和尚の刺青の代わりである。石燕は『画図百鬼』出版の翌年、それを手掛けた書肆の元から『水滸画潜覧』三巻三冊を出す。彼が『画図百鬼』に取り組む頃から、『水滸伝』に関心を抱いていたことは明らかである。[注17]

縁板の上で板壁を叩く小鬼二体のうち左側、棒ささらを持つ方に、礬噲破門のパロディを見出すのは、付会の感をまぬかれえな

いけれど、その隣の小鬼は、明らかに「鳥獣戯画」の有名な場面に登場する蛙のポーズを下敷きにして描かれている。その場面とは、もちろん、「鳥獣戯画」が紹介されるとき頻繁に取り上げられる、兎を蛙が勢いよく投げ飛ばす場面のことである。『画図百鬼』の、該当する小鬼の脇に鏡を置いて、それに映った像と、「鳥獣戯画」の兎を投げた蛙の図を比較したら、ポーズが似ていることがわかる。縁の下で壁を蹴崩している鳴屋は、蛙に投げ飛ばされた兎をヒントに描かれたのだろう。

鳴屋の「鳴」、つまり「鳴る」「鳴く」の字を、「泣く」「啼く」に転じたら、次に来る姑獲鳥（うぶめ）の啼泣につながる。姑獲鳥の図は、石燕が確実に閲していた『古今百物語評判』巻二―五「うぶめの事付幽霊の事」にもある。石燕描くところのものは、これに、佐脇の「百怪図巻」と其の系統の絵巻に見られる「うぶめ」のイメージを取り合わせたように見える。

姑獲鳥の図そのものを見ただけでは、特に目立った趣向が感じられない。しかしながら、丁裏に来る海座頭とひとつながりに考えると、いかがであろうか。

姑獲鳥から海座頭に移る。川の妖怪から海の妖怪へ転じたと同時に、女妖から男妖へと転じている。しかし「水辺の化け物」という意味では、つながっている。

海座頭は海上に浮かぶ坊主姿だから、海坊主の類だと考える説には従うべきであろう。[注18] さらにいえば、海座頭は琵琶法師の姿であって、「怪」vol. 0013（角川書店 平成十四）掲載「絵解き 画図百鬼夜行の妖怪」において、多田克己が、海座頭―琵琶法師―平曲の関連性に触れている通りである。筆者は、この多田説を更におし進めたい。そこで、以下の三つの資料を掲げる。

延宝五年刊『宿直草』巻二―十一「小宰相の局幽霊の事」では、団都なる座頭が、赤間関の名刹・阿弥陀寺で、平家の小宰相と、それに仕える女房達の亡魂に、平曲の才能を見込まれて取り憑かれ、命を助かった代わりに左耳を持ち去られる。

貞享三年刊『古今百物語評判』巻四―九「舟幽霊付丹波の姥が火付津の国仁光坊が事」には「西国又は北国にても海上の風あらく浪はげしき折からは、必ず波のうへに火の見え、又は人形などのあらはれ侍るをば、舟幽霊と申しならはせり……だんの浦などのごとく一度に大勢相果てたるは、猶その怨霊ものこるべし」と見える。[注19]

元禄五年刊『狗張子』巻一「島村蟹」には「昔平氏の一門、長門の国壇の浦にして海にしづみしその亡魂、ことごとく蟹となりて、長門国赤間が関にあつまり、今の世までもおほく有けりと聞つたへし」とある。[注20]

これらの資料から推測するに、石燕が『画図百鬼』に取りかかる頃までに、壇之浦に平家の亡魂がさまようという話が広まっていたと考えられる。とすれば、琵琶法師の幽霊が出そうな海とし

ては、平家の亡霊伝説がある壇之浦が、第一候補に挙がるだろう。平家の悲劇を語る琵琶法師までもが、平家の霊に魅入られて、舟幽霊または海坊主と化した、というのが、「海座頭」図の趣意ということになりそうである。そうなれば、図中の船は、壇之浦の漁師船であろう。

さて、海座頭と平家の亡霊との関連について考察したところで、改めて、丁表の姑獲鳥図を見てみたい。海座頭図から、前にある姑獲鳥図へと、さかのぼって考えるわけである。

川べりの土手に立ちすくみながら、子を抱いて啼く姑獲鳥は、海座頭からの壇之浦つながりで、幼帝を抱いて入水した二位尼の俤に通うのではないかとも思われる。そう考えるならば、流れる川は、壇之浦の潮流とも一脈通じよう。ただし、謎めいているのは、川のそばに墓があることと、卒塔婆の立つ傍らに魚捕りの仕かけが設けられていることである。墓は、姑獲鳥と化した女と、その子の墓に違いない。しかし、仕かけ網は解せぬ。墓の傍で殺生などするものだろうか。

下関には、安徳帝の玉体が、御入水の翌日、地元の中島組の網に御寄りになったので、中島組は拠点とする伊崎に玉体を仮安置した（のち御浜殿と呼ばれ、現在は赤間神宮小門御旅所）、という伝説が伝わる。石燕「姑獲鳥」図中の仕かけ網は、この言い伝えにからめたものなのだろうか。ただし、中島組の言い伝えを江戸の石燕が仄聞した確証など、ありはしない。卒塔婆の傍らに仕かけ網が描かれた、一見不可解な図柄の示唆する意味を、安徳帝の玉体にまつわる伝説にからめて、解いたにすぎないことを断っておく。（続く）

前稿の訂正

20頁12行目　誤「直海、元周ら共著による」→正「直海元周撰」

前稿の補遺

前稿で天狗図について考察した際、筆者は「松に鷹」図のパロディであると論じた。そこでは、石燕が描く天狗が烏天狗というより鷹のようであるとも記した。『画図百鬼夜行』の天狗図がタカあるいはワシに似ているのか、はたまたトビに似ているのか、実際のところ、いずれとも断じがたい。隣の丁表に載る「幽谷響」との関係で、天狗は山奥の松の木にとまると理解したから、人里に近いところに生息するトビではなく、ワシやタカをイメージしていると見たまでである。

しかし、文献にあらわれる天狗は、鳥にたとえる場合、トビが多いことが知られている。

たとえば、『太平記』を見ると、「大ナル金の鵄翅ヲ刷ヒテ着座シタリ」「上座ナル金ノ鵄コソ崇徳院ニテ渡ラセ給ヘ」とある（巻二七「雲景未来記事」。テキストは岩波書店・日本古典文学大系本『太平記』による）。『十訓抄』第一「可定心操振舞事」に天

狗を取り上げた挿話があって、そこでは天狗を「古鳶のよにおそろしげなるを、しばりからめて」と表現している（テキストは新典社注釈叢書六『十訓抄全注釈』による）。

近世においては、元禄五年刊『後太平記』巻二十一「糺河原猿楽能之事付天狗出現之事」に「此山伏忽チ形を変ジ赤面白歯ノ鬼面ト成テ見ルガ中ニ羽翼生ヘリ鴟ト変ジ」と見え、享保一九年の跋がある荻生徂徠の「天狗説」が、象の鼻・鴟の喙・載勝・虎の爪・電の目などと書いている。寛保三年刊『諸国里人談』巻二にある木葉天狗の記事に「鳶のごとくなるに翅の径り六尺ばかりある大鳥のやうなるもの」と見える（テキストは日本随筆大成第二期二四所収のものによる）。

しかし、鳶ばかりではない。『今昔物語集』では、天狗の正体を「翼折れたる糞鵄にてなむ」（本朝仏法部巻第二十「竜王、天狗のために取られたる語」）としている。クソトビとはチョウゲンポウやミサゴのことを指すという。『源平盛衰記』巻八「法皇三井灌頂事」には「虚空ヲ飛事隼ノ如シ」（慶長古活字本 勉誠社昭和五二年刊 古典資料類従一四の影印による）とある。

寛政一二年刊・新井白石『鬼神論』（吉川半七発行『新井白石全集』第六巻所収）には「鵰ノ如キモノ飛来リテ」とある。鵰はクマタカもしくはオホワシと訓ず。李綽の『尚書故実』の記事に基づくもので、そちらには「如鵰鶚」とある。

寛政一三年刊『東遊奇談』巻四「天狗呵猟人」には、東北の山中村の猟師が山の端の松の枝に鷲が営巣しているのを見て、鉄砲で狙ったところ、天地も轟く大音で「やれ待て」ととがめられた、それは天狗であったという話が載る。

つまり、天狗は鳶、鷹、鷲といった様々な猛禽類にたとえられるのである。

とすれば、石燕が描いた天狗を松の枝にとまった鷹とみて、「松に鷹」図のパロディだとするのも、あながち間違いではないことになる。

また、『画図百鬼夜行』において、木魅から天狗、幽谷響へのつながりについて、前稿では詳しく論じなかったので、補足しておきたい。

『和名類聚抄』に「樹神　今案木魅即樹神也。内典云樹神、和名古太万」（風間書房版〈昭和四九〉による影印を参照）とあり、『源氏物語』「夢浮橋」では「てんぐこだまなどやうのもの」（テキストは『増注源氏物語湖月抄』による）とある。石燕は後者の例をふまえて、木魅から天狗へのつながりを考えたかもしれない。藤井高尚は文政一二年序を寄せた『松の落葉』で「さて和名抄に樹神山鬼をこだまといへり、此のこだまのたぐひをてんぐともいへるにて同じやうのものなれば、ものがたりふみにはてんぐこだまとたぐへてもいへりき」と言っている。『画図百鬼夜行』より後代の書であるが、参考までに掲げる。

天狗が大声を出すことについては、貝原好古編・元禄七年刊

『和爾雅』に「山海経、天門山有赤犬、名曰天狗……其疾如風、其声如雷。漢天門志、天狗状如大流星有声」と漢籍の記事を引くのが参考となる。また『日本書紀』舒明紀に「是天狗也、其吠声似雷耳」（テキストは岩波日本古典文学大系『日本書紀 下』）ともある。

ここにいう天狗は、近世文学に登場する天狗とは異なるけれども、先に引いた『東遊奇談』の天狗の例も考えあわせれば、天狗は大声を出すというイメージがあったらしい。すると、『画図百鬼』での天狗と幽谷響との組合せには、天狗が大声を出したのに幽谷響が応えるという趣向あってのものであると指摘できよう。

注

（注1）絡新婦が女に化ける話は『宿直草』巻二―一「急なるときも思案あるべき事」、『太平百物語』巻四―三三「孫六陰蜘にたぶらかされし事」を参照のこと

（注2）『好色一代男全注釈』下巻〈前田金五郎　昭五六　角川書店〉二八一頁

（注3）この指摘は多田克己著『百鬼解読』〈講談社文庫　平成十八〉一二三頁にある。そのほか、蜘蛛妖と光との関係であれば、『伽婢子』巻六―四「蛛の鏡」が想起される。山奥の谷に「白き光り輝き丸く明らかなる大鏡」があって、それに魅かれた商人が近づくと、蜘蛛の化け物が糸でからめとって、ぐるぐる巻きにし、繭に閉じ込めるようにして殺したという話で、『西陽雑俎』に取材しているが、これは蜘蛛の操る火ではない。また、蜘蛛火の話が『西播怪談実記』「佐用春草庵是休異火を見し事」に載るけれども、挿絵を見ても、石燕の図の参考になったとは思えない。

（注4）国書刊行会『鳥山石燕 画図百鬼夜行』五〇頁「鼬」解説を見よ

（注5）国書刊行会『鳥山石燕 画図百鬼夜行』五二頁「釣瓶火」解説を見よ

（注6）叢書江戸文庫二七『続百物語怪談集成』〈平成五 国書刊行会〉一五頁

（注7）『絵本家賀御伽』は日本名著全集江戸文芸之部第三十巻『風俗図絵集』で見られる

（注8）テキストは岩波古典文学大系『謡曲集　下』所収のものによる

（注9）テキストは岩波古典文学大系『芭蕉文集』所収のものによる。

（注10）テキストは日本随筆大成第二期二四所収のものによる

（注11）叢書江戸文庫二七『続百物語怪談集成』二五四頁

（注12）『妖怪図巻』〈京極夏彦・多田克己編　平成十二　国書刊行会〉三四―三五頁を参照のこと。万治二年刊『堪忍記』巻七第二二―九「物ねたみ故に、死して火車にとられし事并亡霊になりて来りし事」の挿絵には神型火車が描かれる（『仮名草子集成』第二十巻二五五頁　平成九　東京堂出版〉。天和三年刊〈享保一二年刊改題本もあり〉『新御伽婢子』巻一「火車桜」の挿絵には水牛と牛の頭を持つ獄卒が描かれる〈古典文庫四四一『新御伽婢子』三九頁〉。貞享四年刊『奇異雑談集』巻四―一「越

後上田の庄にて葬りの時雲雷きたりて死人をとる事」の挿絵には、雷神型火車が描かれているけれども、その頭部は一般的な鬼の印象を呈しながら、大きな耳と嘴が特色的である〈岩波文庫『江戸怪談集 上』二三二頁〉。明和七年刊『近代百物語』巻五―一「巡るむくひの車の轍」の挿絵には、馬頭と一般的なイメージ通りの鬼が火車をあやつっている（『続百物語怪談集成』三三〇頁）。佐脇描く火車は『奇異雑談集』の雷神系火車に近い。

（注13）『近世説話と禅僧』（平成十一　和泉書院）第二章―「火車と禅僧―近世奇談文芸の淵源」

（注14）対訳西鶴全集『西鶴織留』三四頁

（注15）鳴屋は陽の巻の目録に出てこない。さらに、目録に見える化け物の配列は、国書刊行会版・角川ソフィア文庫版『画図百鬼』が拠った善本二種を見るかぎり、実際の図の配列と合っていない。『画図百鬼』の数次にわたる編集を経て、このようになったのだろうが、これについて今くわしく述べる準備はない

（注16）例えば、「大江山酒呑童子絵巻物」（国立国会図書館蔵）、「酒呑童子絵巻」（國學院大学図書館蔵）、「酒伝童子絵巻」（サントリー美術館蔵）など

（注17）家の柱を引っこ抜く話には、伊達政宗の家臣・平田五郎の延慶の碑にまつわる話がある。中国には、『太平広記』巻一五にある唐の法通の話、『客座贅語』にある尤六十の話などがある。しかし、ここは頭巾をかぶる鳴屋のポーズから、明らかに魯智深抜垂楊柳のパロディといえる。

魯智深が柳を抜く図については、遊子館刊『中国古典文学挿画集成』第三巻「水滸伝」で確認するのが便利である。身近な書物で確認したいならば、岩波書店平成七年刊・吉川幸次郎・清水茂訳『水滸伝（一）』に、天理大学付属図書館に蔵される「容与堂本とは別の明版」から採った「花和尚倒抜垂楊柳」図が載る。また平凡社昭和三四年刊・駒田信二訳『水滸伝 上』〈中国古典文学全集第十巻〉には、郁々堂版『忠義水滸全書』の同場面挿絵、その改訳版〈中国古典文学大系第二八巻『水滸伝 上』〉には容与堂本『忠義水滸伝』の同場面挿絵が載る。花和尚が柳を抜く図柄は本によって多少異なるけれども、いずれも、頭巾をかぶる鳴屋が魯智深のパロディであることを確認するに足る。

（注18）たとえば村上健司説。『日本妖怪大事典』〈村上編・水木しげる画 角川書店 平成十七〉「海座頭」の項を参照

（注19）叢書江戸文庫二七『続百物語怪談集成』五八―五九頁

（注20）日本名著全集江戸文芸之部第一一巻『怪談名作集』二八九頁